

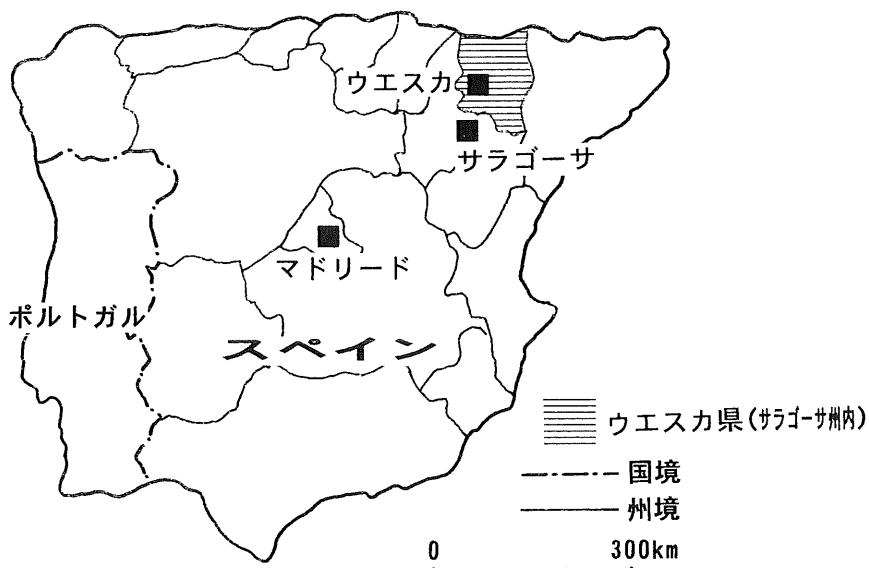
スペインの都市祭礼に見られる伝統と現代

——アラゴン地方・ウエスカ市における聖ロレンソ祭を通して——

竹 中 宏 子

1. はじめに

本報告は、都市祭礼に見られる伝統と現代を、スペインの事例を通して考察するものである。具体的には、スペイン北東部に位置するウエスカ県の県都であるウエスカ市（地図1）で、毎年8月中旬に行われる守護聖人祭（「聖ロレンソ祭」）を対象とする。



地図1 イベリア半島におけるスペインの自治州とウエスカ市の位置

フランコ政権下のスペインでは、政治的に「スペイン」という唯一の国民国家をつくり上げようとするあまり、地方の独自性は抑圧されていた。1975年にフランコ政権が終焉を迎えると、1983年までに既存の「地方」を基盤に自治州（*Autonomías*）が成立し、県区分が整備された。ここにスペインの多様性が露呈されたのである。その後、地方主義と共に、町や村レベルで起こる地域主義の運動が盛んになり、現在に至っている。

地方・地域主義は、共に、当該地の伝統や文化・歴史的遺産の再評価という形で現われる。これは、現在スペインにおいて最も力が注がれている動きの一つで、当分野における研究に助成金が用意されており、地域文化の扱い方を説くマニュアル的な書物も刊行されているほどである。その中で守護聖人祭は、地域の伝統文化を顕在化するには好機であると理解されている。

本報告で扱うウエスカ市の聖ロレンソ祭の場合も例外ではない。そこで本報告では、当祭りで展開される現象や参加者の行動を追いかながら、市民から地域の伝統的な祭祀集団とみとめられている「踊り手」に焦点を据え、その「伝統性」の内実を検討する。また、当集団が活動を行う場の象徴性を把握した上で、そこで顕在化する、「現代」の象徴とも捉え得る若者と踊り手との関係を考察したい。

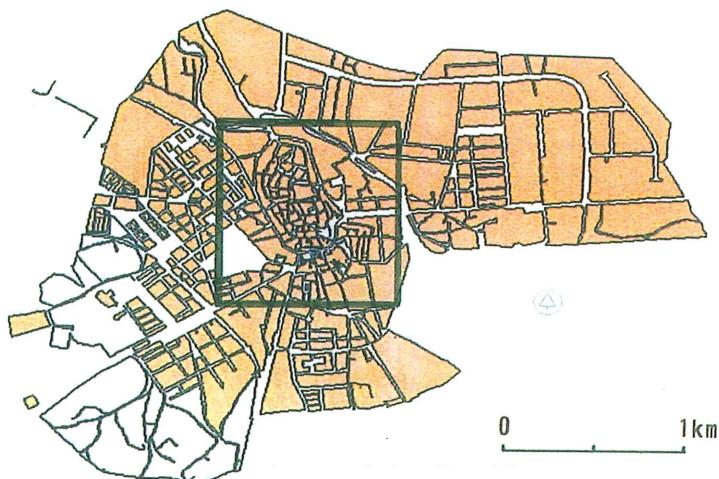
なお、本報告は、報告者が1992年から1998年の間に7回にわたり聖ロレンソ祭で行った参与観察と、祭り期間以外に行った関係者や一般市民への聞き取り調査を基にしている。歴史的な事柄に関しては、文献資料も参考にしている。

2. ウエスカ市と聖ロレンソ祭の概要

(1) ウエスカ市の概要

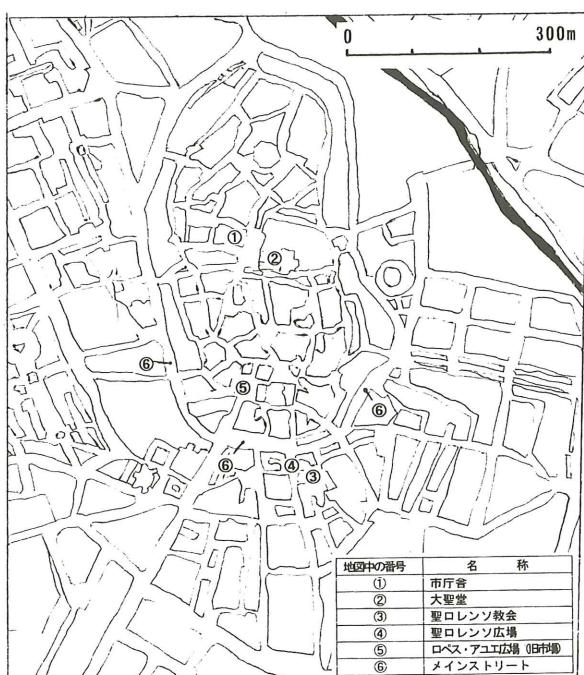
ウエスカ市は、アラゴン州の州政府があるサラゴサから北北東約67kmのところに位置する。

町全体の形状は地図2に見られる通りで、市街区は南北に長い楕円形を描く旧城壁跡から放射線状に広がっている。旧城壁内の地形は、アクロポリス的な小高い丘になっていて、その頂点には町の行政の中心である市庁舎と、宗教の中心である大聖堂が建てられている。旧城壁内部とその隣接部分が旧市街地である。その外側は近代的な街区で、旧市街地のものよりは高層のマンションや一戸建ての家屋が立ち並ぶ。ウエスカの守護聖人である聖ロレンソが祀られている教会は、旧市街地内の旧城壁外部に位置する（地図3）。



地図2 ウエスカ市の形状（ウエスカ市都市計画部資料による）

*色の濃い部分は市街地、中央の四角形の囲みは地図3の範囲



地図3 ウエスカ市の旧市街地（街区等）と主な場所

ウエスカが歴史上都市として登場するのは、紀元前30年にローマ帝国の自治市となったことに溯る¹⁾。現在の名称「ウエスカ」(Huesca)は、このローマ時代の「オスカ」(Osca)から派生しており、イスラム教徒統治下における「ヴァスカ」(Waska)という名称を経て、キリスト教化以後、現在のように「ウエスカ」と呼ばれるようになった。

1096年のレコンキスタ終結後から中世の終わりまで、歴代のアラゴン王がウエスカを拠点とし、ウエスカはアラゴン地方の政治・文化の中心だった。しかしその後、政治・経済的および文化的にも衰退の一途をたどることになる²⁾。

1960年代に工業化の波を受けて人口が増加し、市域が拡大はしたが、1980年代には次々に工場が閉鎖する事態に陥っていった。現在では、公務員を含めたサービス業への就労人口が多い産業構造になっている。2000年の統計によると、町の人口は46,236人で、アラゴン州内では、サラゴーサに次ぐ規模の都市である³⁾。

(2) 聖ロレンソ祭と踊り手

聖ロレンソは、ウエスカの第一守護聖人⁴⁾である。ロレンソは、一般に258年8月10日にローマで生きたまま等身大の火床(parrilla)で焼かれて殉教したと言われ、キリスト教カトリック世界では、重要な聖人だと理解されている。その為、この聖人を守護聖人としているウエスカでは、8月10日を町の祭日に定め、毎年8月9日正午から15日深夜まで町をあげて祭りが執り行われる。

祭りの開催期間中は、実に様々な行事や催し物が執行される。当祭りの進行については、既に別稿で述べた⁵⁾。ここで簡単に紹介すると、宗教行事では、ミサや宗教行列(procesión)のような行事が行われ、その他の庶民的なものでは、闘牛、あらゆるジャンルのコンサート、花火、アラゴン地方またはウエスカ地域の民俗芸能などの娯楽が提供されている。

本報告で問題にする踊り手は、宗教や娯楽に対し、地域の伝統的な行事の担い手として理解されている。彼らは、8月10日の朝、聖ロレンソ教会前にある広場(「聖ロレンソ広場」(Plaza de San Lorenzo))で、その年はじめての踊りを披露する。その後続いて行われる宗教行列では、最後尾に位置し、翌11日には旧市場だったロペス・アユエ広場(Plaza de López Allué)で踊る。2日あけて最終日の15日には、町のメインストリートでパレード形式で行われる供物奉納(Ofrenda de Flores y Frutos)の行列の最後尾に位置し、いわゆるトリを取り。

祭りの期間中、踊り手が登場するところはどこにでも人だかりができ、彼らはかなり目立つ存在であることは明確である。中でも、8月10日朝の人々が聖ロレンソ広場に集まる現象は、そこに集まった人々のほとんどが若者であり、注目に値する。つまり、年に一度、普段、伝統とはあまり縁がない若者が、地域の伝統的な踊りとその担い手を、積極的にサポートするのである。この現象については、4章で再度触れたい。

3. 踊り手について

踊り手の人気は、聖ロレンソ祭開催期間のみではなく日常生活においても観察できる。例えば、踊り手を称えた像が建てられ、町の通りに彼らの名が付されたり、レパートリーの一つの曲がアレンジされ、市が所有する建物の一つから12時と22時を告げる鐘の前にその曲が聞かれる。

このような彼らの人気に対して、踊り手に関する市民の知識は割合に乏しい。周知のことも非常に曖昧で、「踊り手には男性しかなれない」、「踊り手には誰でもなる権利があるわけではない」、「ずっと昔から踊っている」、「小農民を起源としている」といった言葉で表現される。つまり、ウエスカ市民が抱く踊り手のイメージは、「昔から変わらず男性の血筋を通して継承されてきた集団で、成員の起源は小農民である」ということになる。このイメージを踏まえて、ここでは、当集団の起源と歴史的変遷、および構成原理の内実を検討する。

(1) 内部構成と踊りのレパートリー

踊り手は、17才以上の男性で、合計27人である。年によってその数には変化がみられたようだが、現行の規則では、27人という定員数の増減は認められていない。

踊り手各人は、平等な立場にあるわけではない。その中で最も踊り手としての経験の長い者が「マヨラール」

(*Mayoral*) と呼ばれ、グループのリーダーとされている。ピレネー山脈地帯の農牧民の間でも、指導的な立場にある羊飼いはマヨラールと称され、ヒエラルキーの存在が見て取れる。つまり、踊り手集団は、これと同様の形態をとっている⁶⁾。

踊りのレパートリーは5つ⁷⁾ある（写真1、2）。通説では、木の棒を用いて踊るレパートリーは、害虫駆除や



写真1 聖ロレンソ広場にて 「パロス」 を踊る踊り手



写真2 ロペス・アユエ広場に設置された舞台にて 「デゴジャウ」 を踊る踊り手

豊穣祈願の意味があり、農業に関係していると考えられる⁸⁾。

これらのことから、踊り手集団および踊り自体は、農牧業と深い結びつきを有していることが認められる。

(2) 起源と歴史的変遷

集団としての踊り手の起源は、明確にはされていない。歴史的変遷に関しても、詳しいことはわかっていない。ウエスカでは一般に、踊り手に関する最も古い文書は、16世紀のものだと理解されている。

20世紀に入ってからの様子については、人々の記憶を辿ることが或る程度可能になる。重要な転機となるのは、30年代に全国労働連合（CNT）の命令により、何人かの踊り手が宗教行事である聖ロレンソ祭に参加不可能になってしまったことである。その為、祭りのメインとも言える踊り手の参加が危ぶまれた。結局、踊り手集団は、農業以外の職業に従事する者数名を入団させることで、この危機を乗り切った。このことにより、当集団が農牧民以外からも構成されることとなった。ただし、当時から現在と同様、踊り手は大変な人気があり、新たになり手を探

すのに困難な状況に陥ることはなかったと推測される。つまり、踊り手集団存続の危機は、あくまで外的な要因から生じたものであったことに注意したい。

踊り手集団は、このような外的な要因によってのみ従来とは異なる構成員を受け入れたわけではない。先述したリーダーであるマヨラールは、実質上、集団の決定事項などに関して絶対的な影響力をもっている。この力を使って、前マヨラールが集団存続の危機に直面していなくても、本来踊り手になり得ない人々を入団させ、踊り手の数を任意に増やすこともあった。

このように、ウエスカ市民の通常の認識とは異なり、全ての踊り手が農牧民をその継承の源としているわけではなく、歴史的に変化がみられるのである。

(3) 踊り手の継承

現行の規則では、踊り手が引退する、あるいは死亡した場合にのみ、新しい入団が認められている。欠員は、退く踊り手の息子、兄弟、孫、またはオイ^⑨によって埋められる。この規則に従い、直接に男性の血筋のみを辿りながら現在に至っている家系と、姉妹のオイにその権利が譲渡された経験がある家系がみとめられる。そして前節で述べたように、1930年代に政治的要因が契機となって入団した踊り手、あるいは前マヨラールの裁量により入団を許された踊り手から、継承されて続いている家系も存在する。従って、踊り手が伝統的に男性の血筋を通して継承されるというウエスカにおける一般的な認識は、現実と合致しないことがわかる。

4. 8月10日朝の現象と場の象徴性

8月10日の朝、その年初めて踊り手が踊る行事を見物しようと、多くの人々が、小さな聖ロレンソ広場を埋め尽くす。この広場周辺は、現在、少々商店が構えてはいるが、普通、昼間の人通りは非常に少なく、夜になると建ち並ぶディスコバーに人が集まつくるような場である。住居としては、数少ない農業従事者を除いては、新しい住宅を購入するだけの経済力がない高齢者がほとんどである。これらの理由から、この空間は、ウエスカ市民からは「夜の盛り場」として理解されている。

しかし、踊り手の舞台となる当広場周辺は、歴史的にはウエスカの社会にとって非常に重要な空間であった。特に、アラゴン王がウエスカを拠点に活躍していた中世には、聖ロレンソ教会周辺地区はアルキブラ(Alquibla)と呼ばれ、そこではイスラム教徒とキリスト教徒が共に居住していた。中世から18世紀頃までは、町の人口が最も集中している地区でもあった。また、19世紀まで聖ロレンソ広場からメインストリートに向けて町最大の市場が立っていた。これらのことから、旧城壁内に位置する大聖堂と市庁舎周辺が宗教と政治の中心であるのに対し、聖ロレンソ教会周辺地区は、経済や市民生活が動態的に展開される場であったと考えられる。

この史実を踏まえると、現在の日常生活ではネガティブな印象が強い聖ロレンソ教会周辺地区だが、聖人祭になると地域の歴史や伝統が顕在化する場として認識され、普段ではみとめられない価値が付されることになる。この地域の歴史や伝統が最も現われる場で、最も伝統的と認識されている踊り手が、彼らの踊りを披露する。そこに執拗に集まるのは、町の若者たちである。彼らは、より近距離で踊りを見ようと前日の晩から飲み明かし、一睡もせずに広場の前列を陣取ろうとする。踊りが始まると、大きな手拍子で場を盛り上げ、踊り手に対しても敬意を払う。地域の伝統を担う集団と現代の象徴ともいえるべき若者との直接的な交流が起こる現象が見て取れる。

5. おわりに

上述の踊り手と若者の直接的な交流は、ここ10年ぐらいの間に高揚してきた現象である。これは、冒頭で述べたような文化・歴史的遺産の再評価という形をとって現れる地域主義の流れを背景にしていると考えられる。地域性の強調の意味は現代的ではあるが、その表出のときに選ばれる要素は、その地に根ざし歴史的な重みを有する、いわゆる「古い」ものである。ウエスカの踊り手の場合も、市民が抱くイメージに反して、集団の内実は「古く」はなかった。市民もそのことを薄々感じているのであろうが、重要なのは、そこに込められた意味や価値で

あり、事実ではない。つまり、踊り手は、「現代における伝統」あるいは「刷新された伝統」を担う集団と呼び得るだろう。

この地域の伝統を自分のライフ・スタイルとして選び取ったのは、若者である。彼らにとって自地域の伝統と向き合うことは、アイデンティティの問題にもつながる。ここで注意したいのは、彼らが、この行為を現代社会において多種多様に存在する生活スタイルの中から選択し、ルーティーン化する生活サイクルのアクセントとして取り込んでいることである。つまり、地域の伝統とは、グローバル化し、価値が画一化する傾向にある現代社会において、他者には容易に真似できない、一種の「ブランド」となり得る。

本報告は、完結にはほど遠く、多くの課題を残している。今後は、ウエスカの伝統性とアイデンティティ、そして現代社会との関連性をさらに深めて、研究を展開していく所存である。

注)

- 1) それ以前のことについては、イペロ語で「ボルスカン」(Bolskan) と刻まれた銀貨がウエスカ市内で発見されたことから既に、紀元前2世紀後半頃にはウエスカは存在していたと推測される。しかしこの説は、ボルスカンの正確な場所も様子も特定できないので、これが都市であったかどうかは確認されていない。
- 2) ウエスカ市の詳しい歴史的変遷については、別稿(1995, 「都市の伝説と歴史 —スペイン・ウエスカの場合」、『歴史民俗資料研究』5号、神奈川大学大学院歴史民俗資料研究科)を参照されたい。
- 3) アラゴン最大の都市サラゴサの人口は約61万。
- 4) ウエスカの第二の守護聖人は、聖ビセンテ (San Vicente) である。
- 5) 当祭りの進行については、別稿(1996, 「聖ロレンソ祭に現われる『ウエスカ』像—日常と祭りの生活空間を通して—」『生活学論叢』Vol. 1 日本生活学会, PP. 7-10, および2000, 「祝祭組織の構成原理から見た都市社会 —スペイン・ウエスカのペニャの形成と変遷」, 『生活学論叢』Vol. 5, 日本生活学会, pp. 17-18)を参照されたい。
- 6) GÓNZALEZ SANZ, C./ GARCÍA PARDO, J./ LACASTA MAZA, A. J., 1998, La sombra del olvido, IEA, pp. 414-415.
- 7) それぞれ、長剣と短剣を用いる「エスパーダス」、櫻などの硬い木からつくられる棒を打ち鳴らす「旧バロス」と「新バロス」、高い棒の先に吊り下げられた長いリボンを持って踊る「シンタ」、全体像として踊り手の一人が首を斬られたようにみえる「デゴジャウ」である。
- 8) B. RÍO MARTÍNEZ (1985: El dance laurentino, IEA, p. 95) と A. BELTRÁN MARTÍNEZ (1982: El dance aragonés, Caja de Ahorro de Inmaculada, p. 52) を参照されたい。
- 9) 兄弟姉妹の息子。

竹中 宏子 (たけなか ひろこ)

1967年生。国立マドリッド大学大学院博士課程修了。Ph. D (社会人類学)。神奈川大学非常勤講師。文化人類学専攻。主な論文として、「聖人祭のプロセッションに関する一考察：ウエスカのサン・ロレンソ祭を通して」『スペイン史研究』(スペイン史学会) 第10号、1996年、「聖ロレンソ祭に現れる“ウエスカ像”：日常と祭りの生活空間を通して」『生活学論叢』(日本生活学会) 第1号、1996年、「祝祭組織の構成原理から見た都市社会：スペイン・ウエスカのペニャの形成と変遷」『生活学論叢』第5号、2000年、など。なお、著作として、Antropología urbana a través de la Fiesta de San Lorenzo de la ciudad de Huesca Ayuntamiento de Huesca が印刷中。